

歴史認識と民主主義深化の社会学

はしがき

二一世紀も第二のディケイドの後半に入っているが、世界にも日本にも大きな問題が突き付けられている。中東を震源地とするグローバル・テロリズムが広がる一方、核兵器が、北朝鮮の核実験やミサイル発射などによって、依然として人類へのダモクレスの剣であることが示されている。そうしたなか日本は、立憲主義の原則を危うくしてまで、事実上の戦争行為ができる体制をつくろうとしている。東日本大震災からの復興やエネルギー政策や沖縄の基地問題を初めとする日本社会のさまざまな課題に、その影響が現れている。社会学は、他の諸学とともに、それらの課題に取り組まなければならない。

序に詳述するが、そのために日本の社会学は、その歴史認識を再確認し、朝鮮半島や中国や東南アジア諸国とのあいだに真に友好的な関係を打ち立てる方向を示し、アメリカとのあいだでも真に自主的なあり方を確立する方途を示さねばならない。そうしてこそ日本は、世界のあり方についても旧帝國主義・旧植民地主義にかかわった諸国に呼びかけ、この五世紀余の世界史にたいする認識を明確にし、相互の戦争責任ばかりでなく旧植民地・従属諸国への加害責任を率直に認めて、テロや核兵器の恐怖をも克服する真の意味で新しい平和への道を、率先して開いていくことができるのである。

本書は、このような問題意識からの呼びかけを受けた社会学者たちが、みずからの研究教育歴をふり返り、実践との関わりをも意識しながら、全力をこめておこなう問題提起の書である。タイトルは当初「民主主義深化とアジア友好の社会学」と想定されていたが、実際に集まった諸論をふまえて四部編成とし、タイトルを「現代民主主義と海外発信の社会学」にひとたび変更した。しかし、さらに議論をふまえて、最終的には「歴史認識と民主主義深化の社会

学」とした。問題意識を詳細に展開した序を受けて、戦後から現代の日本にかけて、社会学の分野で意欲的な研究教育活動をおこなってきた者たちが、戦後社会学における社会学と社会運動論をふり返り（第Ⅰ部）、苦闘しつつ開拓してきた日本的な地域・企業・階層の社会学を展開し（第Ⅱ部）、そのうえで日本からアジアに広がった村や企業の研究（第Ⅲ部）、さらには日本から世界に広げようとしてきている国際意識、自治論、日本社会学のみならず社会科学および自然科学の全分野にまで視野を広げた研究分野の総括と、それらをふまえたグローバルな社会理論の視座を提起している（第Ⅳ部）。

本書企画の直接のきっかけは、戦後の社会学に足跡を残された北川隆吉氏の逝去にある。氏は二〇一四年四月に亡くなられたが、静かに見送ってほしいというご遺族の意向で広報が積極的におこなわれなかったため、多くの人に知れ渡るのが遅れ、二〇一四年一〇月に名古屋で偲ぶ会がおこなわれたのについて、二〇一五年五月に東京でも偲ぶ会がおこなわれた。そのおり、氏の功績を記念してなんらかの出版企画を実現したらどうか、という話になった。ご遺族は、上のご意向から、追悼論文集などの刊行を望んでおられない。それならば、北川氏の功績を知っている者たちが、自分たちの意志で、現代社会学の課題に応える意欲的な書物を刊行してはどうか、ということであった。

北川氏が生前の一時期関わりのあった東信堂の協力を得られることになり、偲ぶ会に参集した者のうち数人が集まり、志ある人びとに呼びかけ、現代社会学の課題に応える論集を出すことになった。集まった数人と東信堂社長の意向で呼びかけ文と論集の序文を編者が書くことになり、それらを執筆候補者に送り、二〇一六年の早い時期までになんらかの論を書いてもらうことになった。候補者の範囲は、東京での偲ぶ会に参集した東京大学の関係者のほか、北川氏が法政大学、名古屋大学、専修大学などで育てたり、影響をあたえたりした研究教育者たちである。

本書はこうしてなった問題提起の書であるが、これらをもって現代日本の社会学が直面している重要な諸問題にどの程度応えているか、判断は読者にゆだねるしかない。執筆者の一人からは、社会学者の研究教育活動に有機的に組み込まれるべき「実存的決断」の問題が提起された。編者としては、それを第一部の冒頭に位置づけ、世界と日本の巨視的把握を自他の身体認識に関連づけるべきと考えたが、論者は自らの論を序論と四部構成の全体にたいする批判として位置づけたという。そこで、本書ではそれを《特別寄稿》として巻末に位置づけ、本書の問題意識と構成と内容へのこの批判的言説をも含む全体構成の意義については、読者の判断を仰ぐこととした。

執筆者一同としては、今回の成果をここまでにとどめず、なお研鑽を積み、今回の論集に間に合わなかった者たちの成果も含めて、さらなる成果を世に問うていきたいと考えている。それもすべては、戦後日本社会学のもっとも良き遺産を引き継いで、現代社会の諸問題に正面から向き合い、それらと格闘するにたるだけの社会学を築き上げていくためである。

読者諸氏の忌憚のないご批判を仰ぎたい。

二〇一六年九月

編者

目次／歴史認識と民主主義深化の社会学

はしがき..... i

序 今なぜ歴史認識と民主主義深化の社会学か？ 庄司 興吉 3

- 1 現代日本はどんな課題に直面しているのか？ 3
- 2 歴史認識と民主主義深化はなぜ重要なのか？ 5
- 3 日本こそ世界の社会学認識を変えなければならない！ 7
- 4 戦後日本社会学の到達水準と新たな課題 9

第Ⅰ部 戦後民主主義の社会学と社会運動論 13

北川隆吉とマルクス主義社会学 副田 義也 14

- I はじめに 14
- 2 マルクス主義社会学の成立——『講座現代社会学』（一九六五年） 18
- 3 『講座現代社会学』の書評 21

4	マルクス主義社会学の発展	25
5	『現代社会学辞典』の書評	30
6	補遺	36

北川隆吉の組織―社会運動論…その軌跡から見えてくるもの	矢澤 修次郎	39
-----------------------------	--------	----

1	問題	39
2	問題の限定	40
3	北川社会学の出発点	41
4	第一期（一九五〇年代中頃―一九五九年）	42
5	第二期（一九六〇年―一九七〇年）	45
6	第三期（一九七〇年―一九八九年）	49
7	第四期（一九九〇年以降）	52
8	知的ネットワークとして	55
9	結びに代えて	55

第II部 日本的な地域・企業・階層の社会学	59
-----------------------	----

地域社会の変容と自治の単位	蓮見 音彦	60
---------------	-------	----

1	はじめに	60
2	自然村概念の転換	62
3	村落共同体の解体と残存	65
4	農業・農村の変化と地域社会の喪失	74

地域間格差問題と地域再生の課題

——批判的構造分析の視座から

1	問題の所在と限定	79
2	東京圏を含む大都市圏への人口移動の要因	80
3	日本の高度成長政策の推進と歪な国土構造の形成	83
4	一九八〇年代の地域振興策の結末	88
5	財政悪化と地域——一九九〇～二〇〇〇年代、地域にとって失われた二〇年なのか	91
6	地域再生の有効な〈再生策〉(特効薬)はあるのか	93
7	地域社会・経済質量再生モデルに基づく多様な地域再生の構想	98

中小企業の「家」構造と家業の社会学

——社会集団論的アプローチの意義

1	はじめに	109
---	------	-----

鎌田 彰仁
109

北島 滋
79

2	家族経営と事業承継	111
3	家族と家業の境界…家意識と家族従業員制	115
4	家構造と家業の現在	123
5	おわりに	130

産業グローバル化先進都市への変容と社会階層

——豊田市とトヨタ自動車をめぐって

1	はじめに	135
2	地域開発と先行研究の図式	137
3	定住化と職住の接近	139
4	社会関係資本の蓄積と周辺階層の位置づけ	145
5	産業都市形成の段階論	150
6	むすび——都市類型上の意義と階層論へのインプリケーション	153

丹辺 宣彦
135

第Ⅲ部 日本からアジアへ…反省と貢献

日本統治期台湾の同化教育と台湾意識の形成と挫折

1	問題意識	162
---	------	-----

佐藤 守弘
162

2	日本語教育の受容	一八九五～一九二〇	165
3	台湾意識の覚醒	一九二一～一九三四	170
4	一九三〇年代のマス・メディア		173
5	忍従の台湾意識	一九三六～一九四五	175
6	結 び		176

村の比較社会論

1	はじめに	180	高橋 明善
2	鈴木榮太郎と自然村概念の周辺	181	
3	有賀喜左衛門の家・村論の再検討	185	
4	ジャワと沖縄の村	193	
5	中国の村落自治	204	

在中国日系企業の人材マネジメントの現実と課題

1	はじめに	218	柴田 弘捷
2	中国への日本企業の進出状況——量・質の変化	220	
3	雇用環境の変化	223	
4	ホワイトカラー人材の就業意識・行動	229	
5	日系企業の人材マネジメント	231	

- 6 中国人材の「質・能力・意識」の評価のギャップ……………244
- 7 むすびに代えて——低廉労働力依拠思想からの脱却、真の現地化を……………246
- 8 日本から世界へ…何ができるのか？……………

第Ⅳ部 日本から世界へ…何ができるのか……………255

戦後日本の社会学と国際意識……………宮島 喬 256

- 1 はじめに……………256
- 2 戦後の状況と〈世論〉の虚構……………257
- 3 圧倒的な親アメリカ意識とそれを可能にしたもの……………259
- 4 対外意識と権威主義……………261
- 5 「日本人の国民性」論のステレオタイプ……………264
- 6 欧米対アジア…閉じた国民国家の視座……………266
- 7 国民国家イデオロギーと在日朝鮮人……………268
- 8 ネオ・ナショナリズム……………271
- 9 結びに代えて……………274

二〇一五年の沖縄…独立・自己決定権・自治……………古城 利明 277

特別寄稿

「現場からの民主化」と「社会学すること」

——戦後精神史の一水脈

- 1 はじめに 324
- 2 学生とも対等な人間として——はじめての北川 325
- 3 S S M 調査への協力拒否——北川の実存的決断 326

折原

浩

324

日本から世界へ

——いかなる社会理論を発信できるか？

- 1 プログラム科学・愛他主義・新時間プログラム 292
- 2 米ソ冷戦の世界から地球社会と市民連携へ 298
- 3 「帝国」論議・社会形成の論理・市民社会 304
- 4 世界中の民衆を主権者とする地球社会の理論 309
- 5 地球民主社会に向けての日本社会の課題 315

庄司

興吉

292

- 1 はじめに——「『帝国』と自治」をふまえて 277
- 2 東アジアの地政学的変化と沖縄 280
- 3 あるウチナーの想い——沖縄本島北部、本部町在住家族へのヒアリング 282
- 4 独立・自己決定権・自治 286

4	実存主義・マルクス主義・マックス・ヴェーバー——一九三五年生まれの思想模索……	327
5	学恩の二焦点——難問「マルクスに翻案せよ」と、社会調査技法の「両義的」範示……	332
6	「政治の季節」と「学問の季節」との「螺旋」に向けて——「六〇年安保闘争」から……	335
7	政治運動と学問研究との狭間で——「六二〜六三年大管法闘争」から……	336
8	「ヴェーバー生誕一〇〇年記念シンポジウム」と「戦後近代主義」の限界……	342
9	「東大紛争」の政治——社会的背景と直接の争点、当局と教員の対応……	343
10	結びに代えて……	346

編著者紹介

庄司 興吉 (しょうじ こうきち)

東京大学名誉教授 博士 (社会学)。

東京大学文学部社会学専修課程卒業、同大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。
法政大学社会学部専任講師、同助教授、東京大学文学部助教授、同教授 (社会学第一講座)、同大学院人文社会系研究科教授 (社会学専攻)、清泉女子大学教授 (地球市民学担当) を歴任。

東京大学生協理事長 (1999–2003) をへて、全国大学生生活協同組合連合会副会長 (2004–2005)、同会長理事 (2005–2014)、同顧問 (2014–)。

主要著書

『主権者の社会認識：自分自身と向き合う』(東信堂、2016 年)、『主権者の協同社会へ：新時代の大学教育と大学生協』(東信堂、2016 年)、『学生支援と大学生協：民主協同社会をめざして』(丸善プラネット、2015 年)、『大学改革と大学生協：グローバル化の激流のなかで』(丸善プラネット、2009 年)、『社会学の射程』(東信堂、2008 年)、『日本社会学の挑戦：「変革」を読み解く研究と文献』(有斐閣、2002 年)、『地球社会と市民連携：激成期の国際社会学へ』(有斐閣、1999 年)、『人間再生の社会運動』(東京大学出版会、1989 年)、『管理社会と世界社会』(東京大学出版会、1989 年)、『社会発展への視座』(東京大学出版会、1989 年)、『社会変動と変革主体』(東京大学出版会、1980 年)、『現代化と現代社会の理論』(東京大学出版会、1977 年)、『現代日本社会科学史序説』(法政大学出版会、1975 年)。その他編著書、編者、論文など多数。

歴史認識と民主主義深化の社会学

2016 年 月 日 初 版第 1 刷発行

(検印省略)

* 定価はカバーに表示してあります

編著者 © 庄司興吉 発行者 下田勝司

印刷・製本 中央精版印刷

東京都文京区向丘 1-20-6 郵便振替 00110-6-37828

〒 113-0023 TEL 03-3818-5521 (代) FAX 03-3818-5514

E-Mail tk203444@fsinet.or.jp

発 行 所

株式会社 東 信 堂

Published by TOSHINDO PUBLISHING CO.,LTD.

1-20-6, Mukougaoka, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0023, Japan

ISBN978-4-7989-****-* C3036 Copyright©2016 SHOJI, Kokichi